



みなさまの温かなお気持ちやご支援、いつもありがとうございます。

おかげさまで、2026 年は名古屋小児がん基金設立 10 年になります。

10 月 18 日（日）栄ガスビルホールにて、10 周年イベントを企画しております。

設立時から応援してくださっている矢野きよ実様に司会をしていただきます。

支えていただいているみなさまに、ぜひお会いしたいです。ご予約ください。詳細は、後日お知らせします。

ご寄付

2025 年、延べ 700 人もの方々からご寄付をいただきました。おかげさまで活動を継続することができております。

<ライオンズクラブ>から、たくさんのご寄付をいただきました。



★豊田ルネッサンスライオンズクラブ
豊田産業フェスタでの募金活動から
(高校生のボランティアが大活躍)

★豊田東名ライオンズクラブ
チャリティピアノコンサートから
(小児がんにより生後 1 ヶ月で失明した
梯剛之さんのすばらしい演奏)

★名古屋本丸ライオンズクラブ

★弥富ライオンズクラブ
チャリティマラソン大会から

★名古屋シティライオンズクラブ

チャリティコンサートから
(昭和歌謡たっぷりのライブで大盛り上がり)

★新城ライオンズクラブ

★岡崎フォレストライオンズクラブ
募金活動から

★安城南ライオンズクラブ

★刈谷ライオンズクラブ
★豊橋ライオンズクラブ
チャリティゴルフ大会から

★江南ライオンズクラブ

市民の集いでの募金活動から
(ボーイスカウトの子ども達ががんばりました)

★西尾ライオンズクラブ

おしごと体験イベント「ココジョブ」での
募金活動から

<名古屋キワニスクラブ>

から日韓台交流事業に、
助成金をいただきました。
交通費等に活用させていただきました。



<azbil みつばち倶楽部>から
昨年に引き続きご寄付をいただきました。

<クララの贈り物>



八十嶋洋子さんと小宮尚子さんのピアノによるチャリティコンサートでも、会場の募金箱にたくさんのご寄付が集まりました。

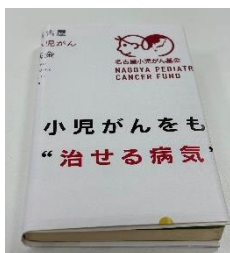
<レモネードスタンド>

放課後ディサービス「未来プロジェクト」
「マンマミーヤ」がレモネードスタンドを実施し、そこからご寄付をいただきました。

<小児がん支援シンポジウム>

高山のがん患者会 Owls 主催のシンポジウムからご寄付をいただきました。

<こんなアイデアも！>



チラシをブックカバーにして、当基金を広報して下さる支援者の方もみえます。

医療機関と地域をつなぐ緩和ケア

名古屋大学大学院教授
愛知こどもホスピスプロジェクト副代表
新家一輝

病気になってもありのままの自分で過ごせる居場所～緩和ケア・在宅緩和ケア・小児緩和ケアを考える～

2025年11月23日（日）、高山市にて、がんサークル Owls 主催のシンポジウム「Life goes on vol.4」が開催されました。

がんサークル Owls は、代表の三井祐子さんを中心に、飛騨地域で活動する患者会です。がん治療の経験をもつ方やその家族を対象に、悩みや不安を打ち明けたり、相談したりできる機会として、座談会や勉強会を開催しています。これまでに、当団体の小島勢二理事長が講演したご縁があり、その際の様子と前回の様子は、それぞれニュースレターvol.7（2023年7月号）およびvol.11（2025年2月号）で紹介しました。



今回のシンポジウムでは、日韓台小児がんサバイバー交流会などを通じて当団体の活動に関わっている私も、小児緩和ケアをテーマに登壇しました。

冒頭、司会を務められた三井さんは、病気があっても一人の人としての生活や思いが尊重されること、そしてそれを実現するために必要なことを、穏やかでありながら強い思いのこもった言葉で語られました。

その語り口から、このシンポジウムが単なる医療の学びの場ではなく、人と人が気持ちを分かち合える「居場所」を地域で実現することの重要性が、自然と伝わってきました。

最初の講演では、駒屋憲一氏（ひだ在宅クリニック／ひだ在宅クリニック丹生出張所 院長）が、自身の生い立ちや、名古屋大学卒業後に大学病院の外科医・研究者として歩まれた経験を経て、地元飛騨で在宅医療に取り組むようになった経緯を語られました。

「住み慣れた自宅や地域で暮らし続け、自分らしく最期を迎えることができる地域づくり」を使命として実践されている姿勢が印象的でした。在宅ケアに関わる人材の充実が在宅看取りにつながるというデータの提示に加え、わが国に根付く儒教における「孝」の文化とその限界にも触れながら、全国にも応用・発展し得る在宅ケアのあり方について、丁寧に説明されました。

続いて、明和靖恵氏（くれよん在宅クリニック看護師・プロデューサー）からは、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）について、自身の価値を知り、それを周囲の人々と共有することの大切さが語られました。

「納得できる生き方、終い方をすべてのひとに」という理念のもと、富山県最大規模の在宅看取りを担う現場で、子どもから子育て世代、高齢者まで、あらゆる世代の人生の最終段階に伴走してこられたこと、そして一人ひとりとの時間を大切に積み重ねてきた実践に裏打ちされた経験が紹介されました。

さらに、在宅医療や緩和ケアを軸とした街づくり・地域づくりの構想も語られ、その言葉の力強さが印象に残りました。

三人目の私からは、病気や障害により生命を脅かされる状況にある子どもと、そのきょうだい・親を含めた家族全体と共にある姿勢の重要性を語りました。

最期の時に限らず、発病時から「治す医療」と「緩和ケア」を両輪として、子どもが子どもでいることができる日常と成長・発達を大切にする関わりについて、「存分に生きるを、一緒に。」という愛知こどもホスピスプロジェクトが掲げる理念とともに、子ども主体の関わりの可能性を紹介しました。

第二部のトークセッションでは、益田大輔氏（高山市議会議員／精神保健指定医）の進行のもと、途中から桶口史篤氏（くれよん在宅クリニック院長）も加わり、医療機関との連携・協働、地域資源のあり方、今後の目指すべき方向性について、登壇者それぞれの実体験をもとに意見交換が行われました。

このシンポジウムを通して、あらゆる世代、あらゆる病期にある人々が、その人主体で「今」を生きるために、緩和ケアが果たす役割の大きさを実感しました。



医療機関と地域をつなぐブリッジとしての緩和ケアの発展こそが、病気になっても自分らしく過ごすための居場所を支えるその可能性と必要性を強く感じる一日でした。

20 年前に名大病院に入院していた小児がんサバイバーの若者とのうれしい再会もありました。

夢になって 小児科医として

ニュースレター4号と5号に掲載した小児がんサバイバーで名古屋大学医学部生だった二人が、研修を経て、名古屋大学小児科に戻ってきました。



孫思佳さん

小児科を専攻してから毎日が学びの連続で、あっという間の一年でした。

指導医の先生方は常に優しく根気強く、私の理解度や成長に合わせて段階的に指導してくださり、その環境に深く感謝しています。

外来や病棟で子どもたちと向き合う時間は私の働く原動力です。体調が回復して元気を取り戻す姿や、少しずつ心を開いて話してくれる変化に大きな喜びを感じます。

今後も一人ひとりに寄り添い、家族からも信頼される小児科医を目指して研鑽を続けていきたいと考えています。

板倉京平さん

私は2008年に悪性リンパ腫を発症し、名大病院小児科に入院いたしました。



このたび初期研修を修了し、2025年度より名大小児科に入局いたしましたので、この場をお借りしてご報告申し上げます。

入院当時より憧れていた小児科医としての一歩を踏み出すことができ、感慨深い思いであります。今日の自分があるのは、主治医であった小島先生をはじめ、皆さまの温かいご支援のおかげに他なりません。

「こどもだけでなく、その家族も支えられる小児科医になる」という自身の信念を胸に、今後も研鑽を積んでまいります。

未熟者ではございますが、引き続きご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

特定非営利活動法人

名古屋小児がん基金

事務局

〒460-0012

名古屋市中区千代田 5-11-33

ST PLAZA TSURUMAI 本館4B

TEL・FAX :052-263-6995

Email: info@npcf.or.jp

送金先

○郵便局

加入者名 名古屋小児がん基金

口座記号番号

00820-9-153642

みなさまの温かなご支援をお願い申し上げます。



詳しくはこちら

○三菱UFJ銀行鶴舞支店(267)

口座名 特定非営利活動法人

名古屋小児がん基金

口座番号 普通 0359380

